

tab

No.
12

2
0
0
8
/
09
/
15

後藤美和子／木村和史／石川和広
野村龍／長尾高弘／近藤弘文
秋川久紫／水島英己／高塚都市魚
倉田良成

榊 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子：残雪／01
野村龍：口笛／02
長尾高弘：あと二回／03
近藤弘文：が折れた腕や1／04
石川和広：頭の星／05
秋川久紫：追憶Ⅲ（浪漫と鈍化）、追憶Ⅳ（欠落と揺籃）／07
高塚都市魚：夕顔／09
水島英己：きみはどこにいるのだろう。／10
倉田良成：忘らるゝ——私の小倉百首から／12

文

- 木村和史：家づくり日誌 その二／14
倉田良成：果歩さんへの手紙——詩集『綿花—シロハルユ—』への覚書として／16
あとがき集／18

画：和田彰

tab 第12号／2008年9月15日（毎奇数月発行）

編集発行人／倉田良成

〒230-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ 201

Eメール／kateis11@k3.dion.ne.jp

Erwachen heiterer
Empfindungen
bei dem Anknüpft auf den Lande



後藤美和子

残雪

さんざめく色彩の帯を

四周に巡らし中央で

額の中の残雪を

シャベルで押してつぶしていく

私は波を待っている

やがて微かにやがて確かに

踏みつぶした記憶に波が押し寄せ

熱せられた水竜となって

竿も旗も円陣も

根こそぎ沖へ流し去る

(音既蝕四三)

野村龍

口笛

莖色の巨人が
弓を引き絞る

壊れていく言葉が 最後の声で歌い

聖典は

微笑む午後を湛えながら沈んでいく

暖かな少女が

少しだけ前髪を切り

測量技師は

死斑に冒されていく母の顔を なんとか写真取ろうとするのだけれど
泣いているので何も見えない

HALは

MAGIへの想いを

処方箋の裏に血で綴る

思い遣りに

余りにも優しく包まれ

(この息子は

死んでいたのに 生き返ったのです

長尾高弘

あと二回

お久しぶりですね。

このペースだと、

死ぬまでにあと二回くらい、
会えるかもしれませんね。

あ、死ぬの主語は私です。

あなたがいつ死ぬかまでは、
わかりませんからね。

で、何の話をしましょうか。

え、話すことなど何もない？

そんなこと言わずに、

天気の話でもしましょうよ。

あと二回しか会わないんですから。

今日は暑いですね。

それではまた。

近藤弘文

が折れた腕や1

が折れた腕や

は石鹼のようにすり減って

いくだけだろ

ここで一つの羽根をひろうわたくしは

存在のしゃっくりである

とおまえは

夜明けに太陽が沈み

言葉であることをかなしみ

が折れた腕や

行方のわからない胡桃の亡霊

は石鹼のようにすり減って

いくだけだろ

根っこが耳に入って

きやつきやつ

と黒い葉の群れをみていたわたくし

黒い葉の群れではなかった

石川和広

頭の星

つぶやこうとした。息をためて。少しも風がない。改札機にカードがすべりこむ。出てくるまでの微妙な時間。いらいら。夕方四時過ぎ。扉が開いたままの車両に乗る。知らない男と並んですわる。いつまでも車両はじっとじっとしている。出発を待つ。走り出せばすぐ俺の住む町なのだ。車両はじっとじっとしている。あまり感じたことのない待ち時間。車両はただじっとじっとしている。反対隣の女が急に立ち上がって扉に向かう。

俺、なんか変なことしたのかな：

つぶやきがきこえたのかな。電車あんまりうごかないから：

女は扉の外に向かってひとり話し始める。ケータイだった。安心した。知らない男も立った。降りて改札へと小走りする。

妙なことになった。代替輸送という言葉が聞こえた。既にたくさんの人が改札に並んでいる。どうも事故のもよう。まあ頻繁にあるのだけど：人身だった。

俺の帰る町には地下鉄の駅もある。けれど、ホーム内のファストフード店で待とうと思った。女性店員が注文聞いてくる。二百円の深煎りコーヒー。メールとタバコを二本ずつ。列車が去り新しい列車が来た。することがなくなって新しい列車に乗る。

そろそろと進んで信号につかまる。その繰り返しの不穏。放送は事故のせいではないことを強調している。丁駅：番ホームにて人身： ホームの番号が聞こえなかった。

俺の帰る駅だった

文庫本を二頁読んだら到着。丁駅コンコースに臨時職員が立っている。二人とも若く「救護」という腕章をし拡声器を持っている。走り去る女のカードが俺の足を轢く。

一家が突然、それぞれ別々の天体から飛来した宇宙人だという意識に目ざめたのは、去年の夏のことであつた：家族の過去や子どもたちの誕生の有様はなおはっきりと記憶に残っているが、地上の記憶はこの瞬間から、贖物の歴史になつたのだ。ただいかにも遺憾なのは、別の天体の各自の記憶（それこそは本物の歴史）のほうに、悉く失われていること：俺はそわそわし始めた。ビッグイシューのことが頭から消えた。さつき読んだ文庫の小説の一筋から、ただただ連想しはじめた：

俺の頭が星だったら

足を轢いた女のカートは流星

コンコースに流れる

大気は真空

真空の中に大気をつめた頭が浮かんでいるのが見える。口々に話したり口を結んだりしている。長い髪、禿頭、白いの、赤いの、黒いおしゃれな帽子。それぞれの光、重力。俺はしっかり真空を呼吸しつづける。深く深く息をしつづけて、昔の学校のグラウンドでみたいに気を失わないようにする。

※ 八連目は三島由紀夫『美しい星』新潮文庫からの引用。（中略部は…で表記した）

秋川久紫

追憶Ⅲ（浪漫と鈍化）

高層ビル群の麓にある庇の傾いたナイトクラブ。点在する丸テーブルの傍らに咲く畏怖と原罪にまみれた接客の女たち。ここで夜毎交わされているのは、夥しい虚飾のモノローグと冷え切った淪落のダイアログだ。暗転の無い虚ろな舞台を彩る昭和浪漫の安っぽいピアノの旋律。求道者を装った客たちと接客の女たちとの間で繰り広げられる紫色の性行為と茶色い経済行為の果てしない綱引き。不適切な詩行の順序を入れ替えるようにして、丸テーブルについた女たちを頃合いを見て入れ替えていく蝶タイ姿の青年。時に序破急の先読みが必要なのは、不用意に女たちが絡まれないようにするためだ。いつしか演出家さながらに手配師の真似事を覚えた青年は開店前の夕刻、葛藤を覚えつつ混ぜ物のウイスキーや水道水のミネラルウォーターを丁寧仕込んでいく。稀にやって来る初老のオーナーが女たちを集めて訓示する欲望の加減乗除と嘘の演劇哲学。彼方で欠勤がちの文化学園の娘がかつてゴルフ場の支配人だったこの店のマスターに一方的になじられる声が聞こえて来る。青年がこの店で鈍化のための如何わしい修行を行なっている間に専攻していたはずの憲法は澁澤龍彦に、民法は伊藤若冲に、刑法は劇団天井棧敷に姿を替えてしまった。やがて六法全書と引き換えにして青年が観た山海塾の公演の客席で偶然見かけたのは小さな丸いバッグを膝に乗せ、雑誌からそのまま抜け出して来たかのような黒髪と切れ長の目の山口小夜子。

※澁澤龍彦：最初に読んだのは、金子國義の表紙画が目を引き桃源社版「エロティシズム」。

※伊藤若冲：「動植綵絵」との出会い、北宋社刊「イメージの文学誌」の表紙画と挿画。

※劇団天井棧敷：リアルタイムで観た芝居は、最終公演のG・マルケス作「百年の孤独」。

追憶IV（欠落と揺籃）

永田町と麴町の中程にある小さな設計事務所。狭量で厚顔な上級技術者たちの放埒と加虐の日常。官吏への依存がもたらすインスパイアの恒常的欠落。唐突に辞意を告げた後、朝までかかって図面を書き上げ、黙って去って行った土木の次長。頻発する雨水量計の不具合。湿式感光紙のきつい匂いが立ち込める中、そこで大人たちが引き起こす性の交通渋滞を初めて目の当たりにした青年。設計士は自室のシーツに残された折り痕を指し、さり気なく秘め事の征服を誇示する。女性アシスタントは交接の余韻に浸りつつ、管理者との意に添わない野球観戦に出掛けていく。そして束の間の憩いの一瞬、赤いテーブルクロスとの喫茶室で批評の言葉と共に熱いミルクティーを流し込む青年。磯田光一との春、秋山駿との夏、キルケゴールとの秋を過ごした感嘆と静謐の季節の連なり。ふと思いついて紀伊國屋書店までタクシーを走らせ、食を絶ってまで上製本の著作集を手に入れた黄金の熱情。やがて青年は雪国への測量行に赴き、白銀の平原に立って、アフオリズムの反物を丁寧に織り上げていく。深夜にようやく完成する一通の斬奸状。そこで倫理は流れ、閨房の聖性は荒れ果てて、青年がいつしか抱くことになった若草色の揺籃期への思慕はついに止むことがない。

※磯田光一：「悪意の文学」を読んでいたら、「悪意のミルクティーですか？」と聞かれた。

※秋山駿：「内部の人間」「地下室の手記」で魂を掴まれ、中原中也論、対談集、批評集へ。

※キルケゴール：中公文庫版「不安の概念」は、赤線を引きながら読んだ唯一の哲学書。

夕顔

持ち堪えられない刻限、静もるデッサンの末、モスグリーンの頂にも垂れ沈むものがある。一度は枯れて朽ちてはいく趣と知ってか。その道々、静かな花卉を手折った。その滴れが今に染まり低くなる。やがて息と引き替えに形は目視に耐えない。遠くで法螺の響きの沼へと延びるその灯火の頃、花卉で沼を舐めながら沈むさ沈むさ見てきたものが。一帯はかつての領有、今は地名だけが残る野線の延長のほとりに該当する。そこに伸びる眼差しの実力はつらい。ひと思いに仕留めてくれるはずもなく、命の明け暮れに静かに言葉を滲ませることになる。だが。それでも底部をあるいは地平を目論む仕掛けを打ち、息の切れるに任せ、持ち堪えられずに没してゆく。

裏まで景色を仕組み、没してゆくものをきつと二度追う。時系列はすでに廃れ、拡がる地帯のそれがぬるい。花卉に沿った意識の階をたどり、さわさわと毛羽立つ経過の、静かな沈み。静いの果ての沈み。そのまま地名となつて撓むか。行方の甚だしい虚妄が四季を帯び始めている、それがこの地帯の名。風が出てはいるが、揺らめきたゆたいながら底部から底部へ、地平から地平へ、くらますことで花卉は残される。茎は脈打たないが、この美しさ。では、そろそろ耐え難い刻限の響きを促すか。同じ匂いの花卉は二度ひらくか。同じ箇所だけ決まって同じ花卉が二度辺りに匂い、辺りはそれを哄笑し沈む。それを追え。だが、沈んでゆく搜索の影は、わたしだ。

水島英己

きみはどこにいるのだろう。

すべては終わった、それが錯覚であることを
正午のひどい暑さが証明している。

重たい身体をどんな神もない八王子の
かつての花街、三崎町（だれのためのミサキ？）に置いていた。
たえがたいということだけが奇蹟のようで、
私は私を理解できない。

昨日の運勢占いでは、

「諦めていたこと、それに会おう」とあり、
放逐されたユダヤ人のように歩きながら、
水瓶座、乙女座、射手座などつぶやきつつ

「五時から開店」という看板を掲げた無数の居酒屋を通過した。

すべての輪郭のようなものが溶けだしてゆき、
三宮の真夏の匂いや、六甲の山肌に沿うケーブルカーのきしみ
阪神・御影（だれのためのミカゲ）の狭い叔母の家の朝夕の念仏の声
貧、虚勢、いつわりのプライドだけの奇蹟にしがみついていた
幻影の街になる。

だが、やがて三崎町の町並みは終わった。思い出も、
それ自体では美しくも醜くもない。

どんな音楽も鳴り響かない故郷の夜が
出会いの彼方でひどくやさしく歌っているようだから
私は眩暈をおさえながら
ささやく。

「ミシユス、きみはどこにいるのだろう。」

(註)

八王子に出た。堪え難い暑さ。たまりかねて居酒屋を探したが、早くからやっているところはない。幻想の居酒屋の詩。最後の引用は、チエーホフの「中二階のある家」(小笠原豊樹 訳)の最後から。

倉田良成

——私の小倉百首から

忘らるゝ

忘れられてしまう私の身のことは、何とも思いません。ただあれほど神前

にお誓いになったあなたのお命が、いかがかと惜しまれてならないのです。

忘らるゝ身をば思はずちかひてし人のいのちのをしくもあるかな

右近

オオヌキ君と知り合つたのは小学校の二年のときだった。

学校を休みがちだった彼がようやくやくまいにち登校してくるようになったころだったと思う。彼はほかの誰も履かないようなりっぱな革靴で学校に来ていて、それほど裕福でもなさそうな彼の家のようすとそれが妙にそぐわなかったことは、おさな心にもなんとなく感じられたが、そのうちにその革靴が、彼がすこしばつこを引いてあるくのと関係しているらしいことがわかつた。ほかにも、体育の時間に集合場所の運動場へ彼とふたりで急いでいたとき、彼がふいに泡を吹いて倒れたことがあつた。痙攣しつつ硬直している彼の軀を引きずって集合場所までたどり着いたが、小さくて細いその軀でも、こういうときには世界に挟まった異物のようなくろぐるとした存在感を示すものだと感じた。そんなことがあつてもまいにち一緒に登校し、下校した。まえに休みがちだったので、オオヌキ君はときどき授業についてこれないことがあつた。同級生や上級生の誰彼となく、そんなオオヌキ君を見くぢしたりからかったりすることもあつたが、私たちふたりはちつとも気にしなかつた。勉強なんかできなくなつたつて、やる気さえあれば学級委員をやつたつてかまわないんだよと、私が下

校時の校門のところを力こめて言ったのを、また上級生が聞きつけてあざけりの声をあげたのは、明けてゆく街の遠いとどろきのようなものであったか。オオヌキ君とはあんまり遊んじゃいけないと、親にも言われた。彼が足を引いてあるくのはショーニマヒという病気のせいで、あれはうつることもあるんだからね。そう言われてもかまわずにいっしょに遊んだ。田んぼや森やひくい丘で、彼がうごきまわれる範囲の場所。あるとき小さな神社の境内に迷いこんだ。オオヌキ君はすこし疲れているようだった。ここでちょっと休んでゆこうと、社殿の木のきざはしに腰かけた。もううちに帰るかいと聞いたら、うんと答えた。送ってあげようかと言うと、ううん、だいじよぶと首をふった。私はなんだかかみそりの細刃で切られたようなかなしみを覚え、オオヌキ君、きみのことはぼくがぜったい守るからね、安心してね、と言った。それからしばらくして私の家がにわか引越すことになった。となりの市だが電車で行くにはずいぶんまわり道をしなくてはならない。地元にはすぐ慣れた。新しく通うことになった学校から帰ると、まえにいた土地でやっていたように玄関にランドセルを放り出し、新しい野山で夢中で遊んだ。夏になってある日外から帰ると家には誰もいない。六畳間には客用の座卓が出ていて、飲みかけのカルピスの入ったコップが一つ、置かれてあった。やがて母が戻ってきて、私を待ちくたびれて帰っていったという客の名をつたえた。彼だった。私から完全にその存在の影が消えていた、オオヌキ君がやって来たのだ。誓約の履行をせまるため、夏のなかをさまざまよって。びっこを引く神のように。

家づくり日誌 その二

盛り土の上にテントを張る。

寝泊まり、食事は当分のあいだ義弟のとこで面倒をみてもらうことになっていたので、テントは必要ないようなものだが、はるばる東京からやってきて、なにもない河原のような盛り土の上でさっそく作業に取りかかるというのもなんだか気持ちが悪く感じられる。現場に着いたらまず一服、とりあえずお茶を一杯、というフォームを崩さなかった腕のいい左官屋さんを知っているが、そのような構えには遠く及ばないにしても、せめて真似事のような気持ちでわたしにも必要のような気がする。なにかから手をつけていいものやら。やらなければならぬことが山のようにあるのは分かっている。整理して、手順を追ってひとつずつ片付けていけばいいことも分かっている。闇雲に走り出してもなんとかなったのはもつと若いころの話で、今のわたしはなぜか必ずのように転んでしまう。そのこともよく分かっているつもりだが、一日で家を建ててしまおうとするような、性格からくるらしい気の焦りがしばしば顔を覗かせる。体調の問題もある。直前のフェンス工事で炎症を起こしたらしい指の関節が、右左10本とも夜中にしくしく痛んだりしてよく眠れないし、手術した右膝も、水がたまっている左膝も相変わらずのぎくしゃく状態だ。

追い打ちをかけるように、80才を過ぎた両親が、心配だあ、大丈夫かあ、心配だあ、大丈夫かあ、とうんざりするほど言っただけで、自分で家を建てようなどと馬鹿なことを考えるんじゃない、もつと普通の生活をしなさい、というわけである。もうじき60才になろうとするこのわたしに。家ができてしまえばなんとでも言わせておけるのだが、形あるものになにもこしらえていない状態で、大丈夫、心配するな、といくら言っても納得してもらえないはずがない。

それもこれも、これまで一度も両親を安心させたことがないわたしにすべての原因があるのだけれども、この期に及んでもなお、親を安心させるために生きるなんてまっぴらだよな、という意固地な思いをますます強めてしまうのは、双方の人生にとって不幸なことかも知れない。ちゃんとした職について、はみ出さずに生きている息子の姿を見て安心したい、などという儂い幻想にすがるのはいい加減あきらめて、黙ってありのままの息子を眺めてくれれば、平均点そこそこでけなげに生きていくわたしの姿が見えてくるはずだと思っただけだ。

スタート地点には立ったものの、風向きは単純ではない。なかでも一番の問題は、形あるものを盛り土の上に建てていくことを、わたし自身が怖がっているように思えることだ。文章を世間の目に晒すことはそれほど怖くないのに、通りすがりの他人の目に見える、というだけの家を建てることに臆病になるのはなぜだろう。

しかし、とにもかくにも引き返せない地点にきた。引き返すつもりもない。

テントは、マルシャルのラバンドウという、20年ほど前に買ったコットンの滞在型小型テントで、子供たちが大きくなってからはほとんど使う機会がなく、団地の部屋の片隅をあぶっていた。捨てるのか、誰かにあげるとか考えたことはない。不思議な魅力を持ったテントで、いつかまたこれでキャンプをしたい、使ってあげたいと心の中でずっと思っていた。それが未来のいつかなのか、過去のいつかなのか、自分でも曖昧ではあったけれども、今回がその機会なのは間違いないだろうし、この機会を逃したらおそらく二度と使うこともないだろう。熊牛原野の吹きさらしの盛り土の上で、何ヶ月にもわたって張りっぱなしと

が。いう重労働をさせるのは少々かわいそうのだが。

団地の部屋ではテントを広げられないので、久しぶりに盛り土の上で組み上げてみると、ブルーがかかった灰色と、朱色っぽい赤の生地も昔のまま色あせていないように見えるし、支柱の錆もほとんど目につかない。図体のわりに細くて頼りなく見える張り綱もしっかりしている。かなり丈夫な素材でできているようだ。

まっすぐゴールを目指すなら、テントなど張らずに、飯場代わりに簡易倉庫みたいなものを購入して、そこに寝泊まりしながら作業にいそしむ方が正解だったかも知れない。後でちらつとそんなふうにも思ったが、このテントを張ったのは、それがわたしの人生だったから、と考えることにする。

五月下旬、北海道はまだ寒い。手はかじかむし、鼻水が垂れてくる。さらにまもなく、連日の強風に悩まされるようになる。テントはぎしぎしと音を立てて揺れるし、鼻水はますます垂れてくるし、自動カナナ盤を使うとカナナ層があつという間に、隣地に飛ばされていく。なんとかせねばならない。

果歩さんへの手紙

—詩集『綿花—シロハルコー』への覚書として

だいぶお返事するのが遅くなって、申し訳なく思っています。お詩集『綿花』恵与のこゝと、改めてお礼申し上げます。

さて、前作『姉妹』もそうでしたが、この『綿花』にもタイトルポエムらしきものはありません。また、「綿花」という言葉に対応する、詩集の側の内的な連関というものもあまり感じられないようです。その真の秘密は果歩さんが握って放さないのでしょね。ノンブルも目次もない。これが、前作に続く、果歩さんの「詩集の作り方」なのだと思えます。

その「詩集の作り方」といえば、これも前作を引き合いに出して申し訳ないのですが、あれに比べ、いつそうの完成度というか、その方向性の揺るぎなさというか、そういったものを強く感じます。

このことはまた、作品の内容にも関わって、そのいわば削ぎ落とされた贅肉や、ある倫理的な意志、いやそれどころか、宗教的な禁欲のようなものさえ覚えて目を瞠りました。それがまず扉のエピグラフの言葉、「切って！切って！切って！」の意味するところなのでしよう（たぶん）。冒頭近くの作品「同じ人に纏まって」などは、ほとんどプロフェッショナル、信仰告白のような色合いを帯びます。

ですが、いわば無神に対しておこなうプロフェッショナルというふうな色合いを帯びて——。

なぜ「無神」なのかというと、私はここに明らかに認められる宗教性というものに、キリスト教に代表される感性のほうには回収されない性格を感じるからです。詩を相手にして宗教論議というのも味気ないものですが、とくに「千百十一点イチイチ、無限の無」「双子電車」「紫空環生」「おサルの木」などには、仏教的な何かを感じると言ったら過つことになるでしょうか。例を挙げると、「壁の向こうは無 壁のこちらは無」「千百十一点イチイチ、無限の無」「ぜんたい青 ぜんたい赤

とそれは敵対しない／ただの違いである」「双子電車）、「生かされていたと感じていたあなたがわたしを生かす／殺されていると感じているあなたがわたしを生かす」（「紫空環生」）、「色がついているものはなにひとつない／色がついているものはぜんぶである」（「おサルの木」などに顕著です。これらに有無に涉らない「空」の面影を見ないほうがむづかしいのではないのでしょうか。般若心経などの言説も思い起こされます。これは何によって果歩さんの詩の現場にもたらされてきたのか。扉の「切って！切って！切って！」は、まるで煩惱、頭燃を払うかのように手書きさされていますよ。

ひとつ考えられることは、ここに私的な履歴、というかエピソードがあつて、それが果歩さんにかかる詩を書かせているのは明らかであるということ。しかし、いったん書かれた詩の理解が、再び私的なエピソードの中に一面的に回帰してしまうならば、詩の価値ということを考えた場合、こういった作品行為に（本人にとつて以外に）どんな意味があるのか、という疑義がもちあがってくるのです。やはり、作者の私性を突き抜けたところに、いかえれば、作者が自分で自分を撥無してしまうような作品行為に見舞われたとき、初めて真の意味で「詩が書かれた」と言えるのだと思います。

そういった意味で、その苦しみや悲しみ、寂しさがどこからやってきたか、それは分からないけれど、詩集『綿花』における禁欲に至る心の足取りは深く普遍に触れていて、その果歩さんの詩的なみちゆきに私は心惹かれるのです。

ところで宗教的なものとは言ったが、「双子電車」にはもつと荒々しいと言つていい初原的な、いわば「他界」が見えてしまう視力のようなものを感じます。例えばこんなところ。

赤いシートの電車に乗って

人間を見るためではなく かみさまのもとへ
出かける

それはぜんたい赤い

祝福しているつもりだろうかとおもう

なぜなら窓の外が窓の外がこんなにも照りか
がやいているから

はんたいむきの電車とすれちがったとき

めだまをやたらおおきく見開いたおんなと

目がある だけど まったく関係のないこと
と

できるだけゆっくり次元をまたいで、時間や

空気を味方につける

(「双子電車」第一連)

ほんのわずかだが、行の間から凄まじいもの
が覗いています。これは果歩さんの資質的な
ことにかかわる問題だろうから、これ以上は
言わないけれど、果歩さんの「道徳」性が神
話の域に根を下ろしていることを思います。

それにしても「湖岸」や「それは古びた仮
部屋の一夜」に見る、哀切を極めた愛を考え
ると、これらはこの世に占める地歩がないと
いうか、この世のどこにも着地点のない性質
のものではないかと思えます。また「かわう
そとかわうそとかわうそのはなし 二 虹色
の橋をわたる」に見られる濃密な「死」のイ
メージも、そのことと相渉っているのだと感
じます。

この世に占める地歩の無さはまた見方を変
えると、この世における束縛の無さとも言え
るわけで、それが顕著にあらわれているのが、
「遠くから来たバナラ」と「胡桃屋」だと思
います。ここに引いてみます。

遠くから来たバナラ

遠くから来たバナラ

ここにはたいくつもりくつもない

手はゆらゆらとじゆうに舞い

こんなところで会うなんて マダガスカル空
港のかなた

さかなになるよ

熱い火も燃える

(「遠くから来たバナラ」全行)

くるみやの子は ぴーちくぱーちく

ランドセル 木のお風呂がすき

空が青く透き通るころ

べにいろのふわふわの花が咲く

さむくなったらくるみをかっいで かぞくで

全員すがたを消します(「胡桃屋」全行)

下手を打つと通俗に墮すぎりぎりのところで
反転し、詩のスイートスポットを打ち抜く、
こういう作品を読んで、胸の内にふくらみ拡
がる自由というもの、放浪や旅、そんなこと
をむしろ抗いがたく思わせる果歩さんの詩人
としての資質を、私は貴く感じています。

この世に占める地歩の無さと束縛の無さの
両者を、この場合、作品系列的に媒介するの17
が「過ぎ去り行く時と星、記録は捨て去って
も」であろうと思えます。作品の最後の三行
「たとえ全部のアルバムをすてても／たとえ
全部の日記をすてても／きつとなんにもかわ
らないだろう」は、「わたしより早くあちらへ
いってしまおう君」という一行と照応し
て、束縛の無さが現世と他界を往還するもの
であるとともに、なんと、詩人の自由と抒情
が、不増不減不生不滅という「空」の思想に
も結び付いてゆく希有な光景を見せていると、
私には思えてなりません。

以上の言葉でこの詩集を言い尽くせたとはい
到底思えません。私の力の至らなさを、この、
あえて言えば「強い」作品集を前にして痛感
します。また読ませてください。果歩さんは
いま、まだ誰も歩いていない荒野の中の道な
き道を、たった独りで先行して歩いているの
です。

confidence

夏が終わる。久しぶりにホール&オーツのCDをかけたら、かつてはあんなに、五月の水溜みたいに瑞々しく思えた曲が、季節外れの蟬の歌のように思えた。寂しくて、いつものクラシックに盤を戻した。(後藤)

物置の骨組ができたが、雨で屋根がなかなかかけられない。組み上げるときに父親が手伝いに来てくれて、感心して帰って行った。愚痴は少なくなるだろう。(木村)

箱そのものについて、どれだけ詳しくとも、何の意味もない、ということに、ようやく気付きました。大事なものは、箱をどれだけ知っているか、ではなく、どのように箱を使って何を作るか、である、ということ。(野村)

今年の夏は生業をやめて初めての夏で、長い休みがとれた。学生時代に戻ったようだった。気分も若返るべきだが、それは話が違った。豪雨、北京五輪、など。個人的には那覇で泡盛を友人たちとへべれけになるまで飲んだ夏ということで記憶に残るだろう。(水島)

中村勘三郎らの八月納涼大歌舞伎で野田秀樹作の野田版愛陀姫を見た。歌舞伎はもとも私たちが見慣れている演劇とは異なり、登場人物の感情やドラマを見せるものではなく、役者を見せるものだと言われており(郡司正勝『かぶき』ちくま学芸文庫参照)、実際、他の出し物を見れば、歌舞伎の目的は役者の得意なポーズやら踊りやらを見せることだということを感じるが、野田版愛陀姫は、その意味では明らか

に歌舞伎ではなく、演劇だった。確かに男の歌舞伎役者が女役を演じているのだが、愛陀姫の上演中は、歌舞伎座が懐かしい劇場小劇場のように見えた。そして、歌舞伎という鏡を通してみると、野田秀樹は充分にわかりやすい演劇をしていることがわかった。歌舞伎を見に行ったことがそう何度もあるわけではないが(駒場小劇場も)、愛陀姫の間は、観客がごく自然に舞台に引き込まれているのを感じた(普通は、かならず誰かがうつらうつらしているのである)。歌舞伎にとって歌舞伎とは何なのか、考えさせられる一夜だった。(長尾)

少し長めの詩をと思い、よって今回から幾度かにわたって一つの詩を書こうと思う。さてどうなるか。(近藤)

『ユブラ』を古本屋で置いてあるだけ、ごそつと買って読んでいます。盆休みには『機動戦士ガンダム』を借りてきて全話観ました。今は『機動戦士Zガンダム』に移っています。『逆襲のシヤア』まではいきたいと思っています。永島慎二『フーテン』も読みました。夢を見たい、そんな時期もあるということですが、それは詩とは関係ありません。コンビニで『永遠のガンダム語録』という本を買いました。誤解されると困るのですが、それが詩になっっていました。一種のセンスでしょうか。今号よりの参加となります。(高塚)

8月後半の一週間スクーリングに行つた。社会福祉士養成課程のカリキュラムのひとつである。十月末で全カリキュラム修了予定。冷房は寒く、固い椅子に一日6時

間。それに一日中同じ課目の講義！しかし、自宅でレポートをやっていると、一人で勉強するからどうしても知識が点になってしまう。講義を受けると点同士がつながり線になり面が出来て具体的な福祉の三次元ができあがる気もした。社会福祉の援助で最近注目されていること。それは当事者の語り（ナラティブ）である。またどのようなプロセスで状況のコンテキスト（文脈）が出来てくるか理解する必要がある。語りは物語だ。文脈も含めこれは言語芸術つまり文学の中核の課題でもあるのだ。人間が織り成す状況を「言葉の網の目」として捉える。平川克美氏の『ビジネスに「戦略」はいらない』でも、会社や顧客の物語が価値の生成の上で重視されていた。また文学が日の目を浴びる日ももしや来るのかもしれない？（石川）

最近、中島みゆきが1980年に出した「生きていてもいいですか」というアルバムを繰り返し聴いています。このアルバム、タイトルといい、黒一色のジャケットといい、シングルカットされた曲がない点といい、ある意味とても挑戦的なアルバムなのですが、何と言ってもその昔彼女が麻布のアパートに住んでいた頃、同じアパートに住んでいたヘレンという名のロシア人娼婦が全裸で殺された事件をモチーフにした「エレーン」という曲に心を震わせられています。「エレーン 生きていてもいいですかと誰も問いたい エレーン その答を誰も知っているから 誰も問えない」というサビの部分の、ありったけの哀しみの感情を込めて振り絞るように彼女の声はずっと頭を離れないのです。このアルバムが出た当初、十九歳だった自分はその事件の背景を知らずに聴いていましたが、その点が明らかになった今、この曲に原罪の重さといったものを感じています。（秋川）

旧友が芝居に出るといっているので、下北沢の本多劇場まで観に行ってきました。

彼女は女優を志すも、一旦はその道を諦めた時期があるといいます。しかし「やはり諦めきれない」と再び演劇の世界に戻り、続けているそうです。「自分に才能がないのはよく分かった、でも、好きだから」そう軽く言っただけのけるまでに、多くの葛藤・挫折があつたに違いありません。中学時代に机を並べた彼女は、校内のリーダー的な存在で華があり、人目を引く存在でした。それから十数年で、彼女は謙虚さを身につけていました。その謙虚さは、強さ・美しさと表裏一体であると感じました。

本多劇場の舞台で、彼女は脇役でした。しかし演劇に不要な役はありません。彼女は大物俳優と同じ舞台を踏み、演劇界の重鎮といわれる作家の脚本を見事にこなしていました。

努力で以つて道を進む時、強さは謙虚さから生まれると、彼女の姿から学びます。また努力を続けることができるのも、ひとつの才能であると思います。（鈴川）

夏のグループ展に向けて、路上に大きく広げたビニールシートにペンキで殴り描きをした。途中何度も俄雨にたたかれた。

記憶に自信がないけど、中学生のとき観た万年筆のテレビCMで、ベートーヴェンが野外でスケッチしていると突然大粒の雨が彼を襲い、譜面のインクは無惨に流れて滲むが、それでも彼は一心不乱に書き続ける、そこへ田園シンフォニーの嵐の章がオーバーラップしてくる…というシーンがあった（ような気がする）。

はたして、頭の中の音に手は追いつくのか!? ダンスダンスダンス!

そういうわけで、絵の題を「野の舞い」とした次第。

Erwachen heiterer Empfindungen bei den
Ankunft auf dem Lande

は、ベートーヴェン作曲第六シンフォニーの第一楽章「田舎に着いて起こる、はればれとした気分の目覚め」。(和田)

ことしで四十回を迎えるという、NHKの「思い出のメロディー」を観た。私にとつてはハイ・シーズンであった歌の数々がいわゆる懐メロになつてしまったのかという感慨は正直あつたが、それよりもさいきん勘づいていて、この番組での歌を聴き、確証を得た気になつた事実がある。それは歌い手が一流であればあるほど、音程にシャープがかかつて聞こえるということだ。殊に演歌などに特徴的で、「歌謡」性の高いものほどそれは際立っている。演歌でなくとも、たとえばリートやオペラの詠唱にもこのことは言えて、こと、ヒトの肉声を通さなければ成立しない歌については、見かけの音符どおりということはいえないことが分かる。この、シャープがかかるという現象のうち一種の夢幻が存在するのであつて、さいきんの色んなポップスがおもしろくないのは、全部がフラットに聞こえてしまうからだ。つまり、そこに夢幻の立ち昇る余地がないせいだと思ふ。ビートルズの声などは、随分シャープを帯びて聞こえたものだが。(倉田)